お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
（郵便番号112）
光文社　出版局

長編推理小説　見知らぬ顔の女

昭和51年8月25日　初版発行
昭和51年9月10日　10版発行

著者　草野唯雄（そうの ただお）
神奈川県川崎市高津区新作1662
発行者　小保方宇三郎
印刷者　堀内文治郎
東京都千代田区三崎町2-18-11
堀内印刷

発行所　東京都文京区音羽2　振替東京115347
株式会社　光文社
電話　東京（942）2241（代）

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。（ナショナル製本）
表紙の模様・意匠登録　116613
© Tadao Sōno 1976

(分)0-2-93(製)02299(出)2271 (0)　¥550
Printed in Japan

長編推理小説・書下ろし

見知らぬ顔の女

草野唯雄

カッパ・ノベルス

目次

一章　拾得物預かり証　5
二章　裏切られた女　20
三章　出逢い　53
四章　乾いた街　76
五章　まぼろしのビル　107
六章　視野の交点　138
七章　赤いサニー　166
八章　見知らぬ顔　202
解説・権田萬治　240

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

本文のイラストレーション　柳（やなぎ）　柊二（しゅうじ）

地図・アトリエ不忘（ふぼう）

一章　拾得物預かり証

1

午前十時四十分――
築地警察署大山町巡査派出所に、
「鞄を拾いました」
と、若い女が届けてきた。
そのとき派出所には制服の巡査はいなかったが、黒い背広に白の開襟シャツの男が一人、机に向かって何か書いていた。
女は、彼のことを刑事だと思った。
三十くらいの年恰好で眼光が鋭く、ガッシリした体つきだった。
男は顔を上げてしばらく黙って女を見ていたが、やがて、
「中身は？」
と聞いた。そっけなく事務的で、そのうえどこか、もの憂いひびきがあった。
「お金です」
「ふむ……」
ジッパーを引きあけて覗き込み、それからヒューと口笛を鳴らした。
「こいつは凄いな」
と、札束を掴み出す。三星銀行の帯封のかかった百万円束が二十二個、机の上に山積みされた。あとはバラの一万円札が三十枚と、千円札五枚。
「全部で二千二百三十万五千円。どえらい拾い物をしましたね」
女は黙っていた。顔にたいした変化は認められない。強いていえば、途方に暮れたといった表情だった。
男は机上の書類の中から「拾得物預かり証」の用紙をとり出すと、複写カーボン紙を挟んでボールペンを握った。
「拾った場所は？」

「入船町郵便局の前の道ばたです」
「時間は？」
「十時半ちょっと過ぎくらい」
「というと、十時三十五分くらいですか」
「ええ」
「あなたの住所氏名年齢、それに勤め先をどうぞ」
「月島四の二五の三、月島荘六号、田中和子、二十四歳。勤め先は銀座六の二五桜ビルの帝国信用金庫本店です」
男は記入を終わると、机のひき出しをあけてサックに入った印鑑をとり出した。
築地警察署大山町巡査派出所の下に『吉富』の判コを押すと、複写の下のほうをちぎって女に渡した。
「いまごろはもう本署に紛失届けが出てるかもしれませんが、落とし主がわかったらこういうことになります。まずその落とし主があなたのところへ行って、謝礼金と引き換えにその預かり証をもらう。謝礼の額は拾得額の一割から二割まで。これが普通のケースですが、これだけの大金となると一応大事をとってあなたと落とし主に署に来てもらい、警察官立会いのうえでということになるかもしれません」
「はい。わかりました」
女は預かり証を受け取った。
「そんなことはまずないと思うが、もし落とし主の届け出がなかった場合、六カ月経過すれば、この金は全部あなたのものとなります」
やはり、女の表情は不変だった。
「そのときは、飯田橋の警視庁遺失物係へその預かり証を提出してください」
「はい」
「あ、それから念のためにお尋ねするんですが、何か用があってそこを通られたんですか」
「社用で京橋社会保健事務所へ行った帰りなんです」
「ああ、入船町の」
「はい」
「それから、これだけは厳重に守ってもらいたいが、この金を拾ったことを、こっちから通知があるまでは絶対極秘にして誰にも話さないこと。たとえ親兄妹にでもね。というのは犯罪に絡んだ金かどうか、一応隠密に調査をしなければならないからです。その恐れがないとわかったら、直接あなたに通知します」
「わかりました」
「では、そういうことですから。どうもご苦労さまでし

た」
女は一礼して、派出所を出た。
かなりな美人であった。が、明るいという感じではない。まつ毛が長く、どことなく憂愁の影をひめた美貌だった。見ようによっては、何か心に深い傷をうけたものの表情ととられなくもない。
だが、男の関心はそんなことにはなかったらしい。
歩きながら胸に下げたペンダントのロケットの蓋をあけ、小さく折り畳んださっきの預かり証を入れる女の動作を熱心に見送っていた。
女の姿が見えなくなると、預かり証の控えの半ペラを破りとり、それで印鑑の朱肉を拭きとった。印鑑は机のひき出しに戻し、朱肉を拭いた紙は小さく丸めてポケットに入れた。
ボールペンを元の場所に戻し、椅子を机の下に押し込んだ。黒い上着を脱いで、拾得物の鞄と一緒に左手に持った。これで一応鞄がかくれる。
チラと灰皿を見る。
(いや、タバコはここではのまなかった)
ゆっくりと派出所を出ると、いったん立ち止まって左右を見た。
車が走り、人が歩いている。何の変哲もない街の風景だ。
女が行ったのとは反対の方向へ大股に歩き去った。

2

午前十時四十分——
中央区明石町の聖路加病院救急車入口に、一台の個人タクシーがすべり込んできた。
とび出してきた運転手が看護婦をつかまえて、「乗った客が急病で倒れた」と言った。
泡をくった様子で、顔色を失っている。
看護婦が後部座席を見ると、なるほど年寄りの男がシートの下にころがり落ちている。
口のはたに泡まじりの黄色い吐物。顔色は乾いた土のようで、唇は青紫色になりチアノーゼ状を呈している。
息はかすかにしているようだ。
看護婦はすぐ医師に連絡した。医師が出てきて、ひと目見るなりストレッチャーに移して治療室に運んだ。が、それまでだった。応急処置をとる間もなく老人は死んだ。
変死であるから、警察の検視を受けねばならない。連

絡がとられて、築地警察署から三名の係官がやってきた。長は小林という警部だった。

医師の診断は「狭心症発作による心臓破裂」である。解剖の結果でないと断定できないが、おそらく左心室の前壁で心尖に近いところであろうと言う。

老人はこの陽気に、キチンと夏背広の三つ揃いを着てネクタイもしめていた。所持品を検査すると、財布、鍵、印鑑、それに名刺入れが出てきた。

名刺には「原　嘉孝」とあって、住所は中央区明石町一八、明石マンション二三号室。それに電話番号。肩書の「昭和大理石株式会社顧問」の活字をボールペンで棒を引いて消してあるのは、現在その職を退いているということであろう。

小林警部は、その電話番号にダイヤルしてみた。

若い女性が出て応対ののち、父に間違いありませんと言った。彼女は、それから十分後に病院に駆けつけてきた。遺体を確認し、とり縋って泣く。ここまでは、どの家族にも見られる愁嘆場に過ぎなかった。

問題はその後に、発生したのだ。

「父の所持品に、黒革のショルダーバッグはなかったでしょうか」

激情の波が一応納まってから、娘の原澄子が言い出したのである。

「ショルダーといっても、紐は短くして手にさげていたはずですけど」

「どうだったかね？」

小林は、刈谷運転手を見た。

事情聴取のため、彼はとめおかれていた。

「そう言えば乗り込まれるときに、そんなのを提げておられたようでしたね」

刈谷は首をひねって、

「しかし、おかしいな。車から運び出すときは、あとに何もなかったと思ったがな……」

「中には何が入っていたんです？」

小林が澄子に聞く。

「現金で、たぶん二千万円を超す札束が入っていたと思います」

「二千万円!?」

小林は目を剝いて、

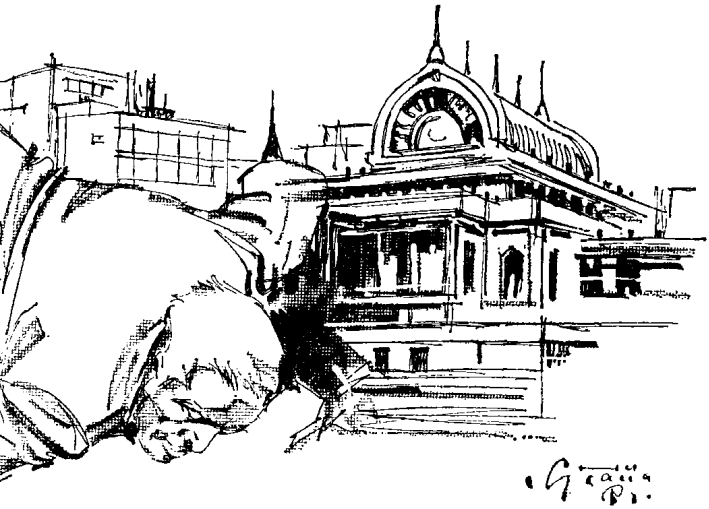
「そいつは大金だ。とにかく、すぐ車を調べてみましょう」

と刈谷と一緒に出て行ったが、間もなく戻ってきた。

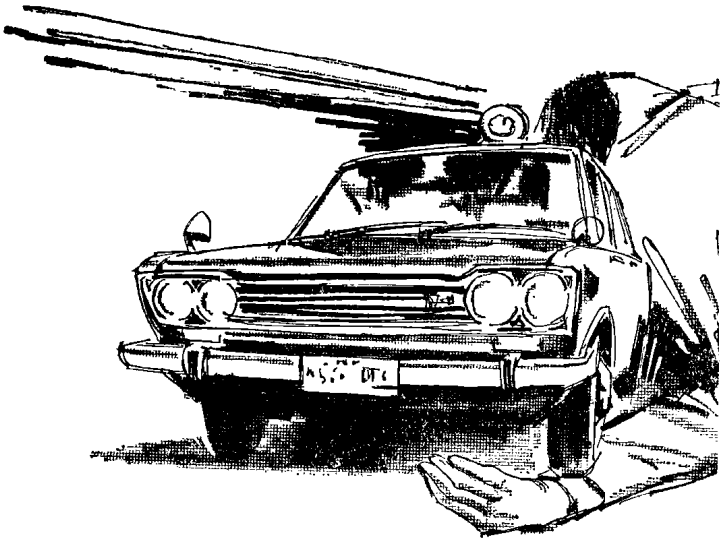
「車には何もありません。それにしてもそんな大金をどうして？」
「父は株券を全部売り払ったんです。それで今朝、その売却代金を渡すという通知があったので、八重洲の山三証券へ出かけたんですの」
「そうか。そう言えば、車を止められたのは、確かに山三証券の前あたりでしたよ」
という刈谷運転手に、
「そのときは、確かにバッグを持っていたんですね」
と小林が聞く。
「ええ、持っておられました。それを抱くようにして乗り込まれたのを、はっきり覚えています」
「それがないのはどういうわけですかね。病院に着いてかつぎ出したときは？」
「さっきも言ったように、あとには何もなかったと思いますよ。客を降ろしたあと、シートの上下を見るのはわれわれの習慣になっていますからね」
「思いますというのは、確信はない、という意味ですか？」
「絶対なかったかと言われると、どうもね。なにしろそのときは、ご本人の容態のことで頭がいっぱいでしたから」
「シートから落ちたのに気づいたのは、どのへん？」
「そうですね。京橋税務署の前を通って、築地につき当たった四つ角を左折してすぐでした」
「とにかく、車に乗せたときからのことを、ひととおり説明してください」
「承知しました」
刈谷運転手が語ったのは、こうだ。

老人は、この大都会の都心の人と車の渦の中に、ひどく不安定な姿勢で立っていた。
黒いバッグを提げて、前かがみの上体をこっちに向けていた。空車を物色している人間のポーズだった。
反射的に刈谷運転手はブレーキを踏んだ。と同時に、老人が左手を上げた。車を歩道に寄せて止めた。
オートドアを開く。老人が乗り込む。
その老人の泥のような生気のない顔と危なっかしい身のこなしが、一瞬刈谷にいやな予感を与えた。
が、そういう感じには馴れている。客はいつも立派で感じがいいとは限らない。
スタートした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton



「どちらまで？」
客が何も言わないので、刈谷のほうから聞いた。個人タクシーで、そう無愛想な運転手ではない。少なくとも、自分ではそう思っている。客と世間話をすることも、少なくはない。
「明石町。聖路加病院の近く」
声が低くて、一度聞き返したくらいだった。シートに腰を下ろしてからも前かがみになって顔を上げようとしない。
バックミラーに、薄くなった白髪が映っていた。
その間に、車は東京駅八重洲口前を通過した。六丁目都庁角から左折して永代通りに入った。
京橋、宝町を通過。八丁堀から右折して新富に入ったとき、老人が窓ガラスを下げて顔を出すのがわかった。この車は冷房車ではない。そのうちそのうちと思いながら、まだ取りつけてなかった。
バックミラーに映った老人の額に小さな汗の玉が浮いている。ハッハッという短い呼吸音が聞こえた。刈谷はスピードを落とした。
「お客さん、どっか具合が悪いんじゃありませんか？」
「いや、大丈夫」



老人は低く、とぎれとぎれに答える。
「久しぶりに、街へ出て、排気ガスを、吸い過ぎた……」
後続車がクラクションを鳴らした。刈谷はまたアクセルを踏み込んだ。
それからは車が混んで、しばらく運転に専念した。築地二丁目から左折して明石町に入る。行く手に、聖路加病院の尖塔が見えてくる。
「どのへんですか?」
刈谷が聞いた。返事がない。
バックミラーを見ると、客の姿がない。びっくりしてブレーキを踏むと、道の左側に寄せて止めた。シートの背越しに覗き込むと、危惧したとおりだった。
老人はシート下に、横向きの姿勢で転げ落ちていた。口から泡まじりの黄色い液体を吐き、目は固くつむったままだ。
ひと目見て、これは危ないなと直感した。老人の胸が、ほとんど動いていないのである。降りていって、
「もしもし、もしもし」
腰のあたりに手を当てて、何度か強くゆさぶった。が、反応がない。
(さあ、どうするか?)

刈谷は考えた。倒れた老人への心配より、突然自分にふりかかってきた災難、自分の車が汚されたことへの迷惑感のほうが強かった。

が、こうなってはそうも言っておられない。

老人の所持品を調べて家に運び届けるという手もあるが、それより最寄りの病院に運び込むのがいちばん人道的な処置であろう。

幸い、聖路加病院が目と鼻の先だ。

刈谷は運転席に戻ってドアをしめると、スタートしてすぐ、病院の「救急車入口」にすべり込んだのである。

「じゃ、八丁堀あたりでこの人が窓をあけた。それからこっち、病院に着くまでずっとその窓は開きっ放しだったわけですね」

小林警部が聞いた。

「そうです」

「するとこの人は、苦しさのあまり窓から上半身をのり出した。そのときバッグが窓から落ちたという考え方も成り立つね。もう一つの解釈は、ここにかつぎ込んだあと車ドロにやられたか」

「しかし、ドアは全部ロックして来ましたよ」

「三角窓もしめましたか？」

「いや、それはあけたままでした」

「プロの車上荒らしなら、そこから手を入れてオートドアを開けるぐらい朝飯前ですよ」

「しかし、なんども言うようですが、やはり車から運び出したときは、あとには何も残っていなかったと思います」

「うむ……」

小林はちょっと考え込んだ。

二つの考え方があると言ったが、実はもう一つあるのだ。それは、この運転手が老人が倒れた時点でふと悪心を起こしたとしたら、という考え方だった。

バッグのジッパーをあけて中の大金を見る。そこでバッグをどこかに隠す。その場合の隠し場所は？　まず最も合理的なのは東京駅八重洲口のコインロッカーだ。ひき返すにしても、車ならわずかな時間である。それに老人が倒れたのを知った場所にしても、彼の言うのよりもっと東京駅に近かったかもしれない。

まさか車のトランクに隠すような無謀なことをやるとは思えないが、念のためそれも一応確かめておく必要があろう。

そのほかに、これも念のために確かめておかねばならぬことがある。

小林は電話局に番号を聞いてから、八重洲の山三証券に電話した。用件を説明すると担当の職員が出て、確かに今朝原さんに現金を渡したという。本人の印鑑をついた領収証もとってある。

金額は二千二百三十万五千円。成行き指定で売った預かり株の代金で、今朝銀行から引き出して渡した。百万円束の二十二個には、三星銀行の帯封がかかったままだった。

店では銀行預金をすすめたが、都合で現金がいるという。それではと社名入りの大封筒に入れて渡そうとしたが、原は鞄を持ってきたからと断わって直接入れたそうだ。

これで事態はだいぶはっきりしてきた。

と同時に、二千二百余万円という大金の行方が、大きな謎として浮かび上がってきたのである。

「何か事情があって、株をお売りになったんですか」

小林は澄子に聞いてみた。これも念のためだった。

「父は以前大理石会社の社長でした」

澄子が言った。小林はうなずいた。名刺の肩書からも、そんなことではないかと思っていたのだ。

「原石を輸入する関係で、二度ばかりイタリアに出張したことがあります。ピアレジオにあるモンテカチーニとアンローという二つの大理石会社から石を輸入していました。このモンテカチーニの社長ととても仲がよくなって、ピサ、フローレンス、ベニスと一緒に旅行したことがあって、そのときのスライドを何度も見せられました。この社長さんもかなりな年配の方で、お互いに老境に入ったが、一生の思い出にもう一度旧交を温めにやってこないかという誘いを受けていたんです。父は昔から心臓病の気があって、最近心臓衰弱症の診断を受けて節食療養をつづけていましたが、まだ動けるうちにと最後の欧州旅行を思い立ったのです。お金をつくったのはそのためでした」

そういう性格なのか、澄子の説明はまわりくどい。

「それにしても、そんな大金の必要は」

「この秋にはわたしの結婚も控えていましたし、あれやこれやでもの入りでしたから」

「なるほど。わかりました」

その話に嘘はないだろう。

容疑者でもないのに、それ以上ほじくるのは非礼とい

うものだ。最後にショルダーバッグのくわしい特徴を聞きとってから、小林は質問を打ち切った。
原老人の死は自然死以外の何ものでもないので、問題はない。解剖の必要もないのでこのまま遺体を引き取らせることとしたが、残ったのは大金入りバッグの紛失事件である。
盗難、遺失、いまのところまだいずれともきめられないが、とにかく原澄子から遺失届けを出させたうえで捜査することにした。
むろん、署に帰る前に、小林は刈谷に車のトランクをあけさせるのを忘れなかった。刈谷はそう要求されたとき露骨に不快な顔をしたが、そんなことにこだわってはいられない。
だが、やはりトランクにはそんなものはなかった。
「あんたも、今日はだいぶ稼ぎ損なったね」
別れぎわに小林が言うと、
「いや、よくできた娘さんで、車を汚したのやら何やらで過分にいただきました。今日は縁起が悪いんで、もう帰って寝ますよ」
と、刈谷運転手は答えた。
タクシーが築地方面へ向けてスタートすると、小林は部下の一人に耳打ちした。その刑事は、来合わせたタクシーを拾って刈谷の車のあとをつけた。

3

隅田川にかかる新大橋から、茅場町、築地を経て汐留に至る道を新大橋通りという。
午後一時——。
この通りの、新富と入船の両町に挟まれたあたりで、溝尾、服部の両刑事が聞き込みをやっていた。
「今朝十時半ごろ、このへんで黒革のバッグを拾ったような人はいませんでしたか」
かなり広い通りで、商店はパラパラとしかない。したがって、緻密な聞き込みというわけにはいかない。
「そんなのは見なかったね」
「そんな話も？」
「いや、そんな話も聞かないね」
通りに面して間口をあけている商店の答えは、みな同じだった。店といってもこのあたりは卸商が多いのである。
溝尾のほうは、はじめからこの聞き込みは投げてかか

っていた。
「二千二百万円入りのバッグといえば、かなりの重さだぜ。気分が悪くなって窓から首を出したにせよだ。そんな重いものを、わざわざ窓の上までかかえ上げるとは考えられないな。病院にかつぎ込んだあと、車上荒らしにやられたのさ」
「しかし、運ちゃんは、そのときはすでになかったと言ってるんだぜ」
「なかったように思うと言ったんだろう。やっこさんのカン違いさ。人間のほうに気をとられて、つい見逃したんだ」
「でも、かつぎ出したあと、やっこさんは全部のドアにロックしている。そんなときは必ず車内を見回すのが、タクシー運転手の習慣じゃないのかね」
「と言っても、後部ドアは自動ロックだろ。運転席に坐っていて、しめられるんだ。後部シートの隅々まで見回したとは考えられないね」
「じゃ、運ちゃんがネコババしたという線は、どうだい?」
「小林係長も、それを考えた。だから、柿沼刑事を尾行させた。だが、運ちゃんはそのまま家へ直行し、一杯のんで昼間から寝てしまったらしい。運転手ってやつは猫一匹嬲き殺しても、縁起をかついでその日は仕事を休むそうだ」
「しかし、駅のロッカーか何かに隠しておいて、翌日取りに行く手もあるぜ。柿沼くんは、それまで張り込むのか?」
「いや、そこまではやらんだろう。というのは、運ちゃんがそんなことをやるはずはないという意見に傾いたからだ」
「どうして?」
「老人が車の中で死んでいたのなら、そういう悪心を起こす場合も考えられるだろう。だが、病院に運び込むまで老人はまだ生きていた。だから、そう簡単にネコババはできないんだ。老人が常態に復すれば、すぐにバレることだからな」
「人間の心理がそれほど簡単明瞭に割り切れるものであれば、問題ないがね」
服部がまだ粘る。
「瀕死の老人の容態を見たとき、これはもう助からないと見込みをつけたのかもしれないぜ」
「そんなふうに見れば、いつまで経ってもキリがない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton